

論文の概要および審査結果の要旨

氏 名（本 籍）	徳安 浩明（鳥取県）
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	乙第55号
学位授与の日付	平成28年3月3日
学位授与の要件	佛教大学学位規程第6条
学 位 論 文 題 目	たたら製鉄による中国山地の開発に関する歴史地理学研究
論 文 審 査 委 員	主査 植村 善博（佛教大学教授） 副査 渡邊 秀一（佛教大学教授） 副査 平井 松午（徳島大学教授）

〔1〕論文の概要

本論文は近世から近代の中国山地におけるたたら製鉄とそれに関連する地域と開発の問題を歴史地理学的観点から研究したものである。中国山地は近世から近代前期までの約300年間に於いて日本の鉄生産の8割を供給した最大生産地帯である。風化花崗岩を採掘し水洗比重選鉱により砂鉄を採取、製鉄、製鋼する全過程をたたら製鉄とよぶ。本研究は地域とそれを構成する歴史景観を基本理念に設定し、たたら製鉄が流域に与えた影響と地域の利害対立、山内集落および村方村落の経営上の特徴とその変化、砂鉄採取跡地の土地利用と開発の問題を緻密な史資料分析とフィールドワークにより解明した労作である。その内容は『人文地理』、『歴史地理学』、『地理科学』、『立命館地理学』など査読付き学術雑誌に掲載された論考を集大成したものである。

本論文は3部8章および結論から構成されている。

第Ⅰ部序論、第1章 「たたら製鉄と開発に関する研究史と課題」 において、たたら製鉄の製錬、鍛錬部門および砂鉄の採鉱部門と開発に関する膨大な研究史をていねいにレビューし、研究課題を明確に導き出している。また、用語の意味と定義について整理したうえで研究の目的と方法を提示している。

第Ⅱ部鉄穴流しと濁水紛争

第2章 「鉄穴流しの方法と土地開発」では、製鉄および鉄穴流しの技術改良を取り上げ、18世紀中頃までに洗い桶型鉄穴流しが普及し通年稼業化に貢献したこと、それが濁水紛争を激化させた要因であることを明らかにした。

第3章 「日野川流域の鉄穴流しにともなう水害と対応」では鳥取県日野川流域における鉄穴流しの実態を把握し、多量の流下土砂による下流域での河床上昇と水害多発を主とし

た濁水紛争の実態を詳細に検討している。鳥取藩は鉄穴場での砂留設置の義務化や鉄穴流しの制限を通達したが、文政六年の大水害後に鉄穴場を3～5割まで削減させた。そして、同じ藩領内の上下流の利害調整と施策がうまく機能してたたら製鉄が一定継続できたこと、明治期には上下流間の協調体制が崩壊してしまったことを明らかにした。

第4章 「吉井川上流域における鉄穴流しと濁水紛争」では、岡山県吉井川流域における濁水紛争を検討し、津山藩領の上流域と岡山藩領の下流域との対立は18～19世紀に激化し、鉄穴流しは繰り返し禁止されてきた。また、明治期に再び増加した鉄穴流しに対して岡山県議会は政府に稼業制限を強く要求した。このため、砂鉄採取が厳しく制限され操業停止に追い込まれたこと、複雑な藩領の入り組みにより吉井川流域ではたたら製鉄が全体に低調であったことを明らかにしている。

第Ⅲ部 たたら製鉄による山地開発の諸相

第5章 「山内の立地とたたら製鉄への労働者集団の特徴」では、『勸進帳』などの新たな史料類を利用して鉄山労働者の流動性や社会階層、山内と村方との関係、通年稼業化にともなう村方の非技術系労働従事が増大したこと、村方では農林業と製鉄関連労働とを組み合わせた複合経営であったことなど、たたら地域の社会的特性を実証した。

第6章 「美作国真島郡鉄山村における鉄穴流しと土地開発」では、当地における鉄穴流しの実態、その地形改変跡地が78%を占める耕地の開発過程を詳細に分析している。そして、従来から流し込み田とされてきたものは確認できず、新田開発は鉄穴流し跡地への流水客土法を利用したものであるという新たな解釈をえる成果をあげている。

第7章 「鉄山経営者による耕地開発と集落形成 — 伯耆大山南麓の宮市原の事例 —」では、日野郡の鉄山経営者近藤家による明治期の耕地開発が労働者用食料の増産を目的としたものであったこと、そのために明治13年に長大な用水路を開削し総計19町余の土地を耕地化したこと、閉山後は失業労働者らの入植の受け皿になっていることを明らかにし、従来の見解に修正をせまる成果を得ている。

第8章 「近代以降におけるたたら起源集落の再編成 — 吉井川源流部の遠藤の事例 —」は、岡山県栄金山の山内へ失業した他地域の鉄山労働者らが入山して集落を形成したが、閉山後は遠藤居住の25戸、および鉄山労働者の定住17戸とその分家7戸が同位置に存続して耕地開発を進めた。さらに、居住環境のよい土地への移転が促進され集落の広域的二次分散が生じた。そして、現金収入獲得のため製炭業や林業労働、近年ではウラン採鉱や観光業に従事して集落が維持されてきた経緯が解明されている。

結論 「たたら製鉄による中国山地の開発と地域性」において、以上の研究成果を①日野川と吉井川両流域にみられるたたら製鉄の地域的相違とその要因として濁水紛争の調整のありかたの重要性、②山内立地が居住域拡大と耕地化を推進した過程および閉鎖的、低生産的とする従来の見解への反論などを指摘して要約している。さらに、今後の研究課題として①鉄穴流しの技術変化の史料実証、②史料の少ない山陽地方での新たな研究法の開発と調査の推進、③村方住民の社会階層性の研究、などの必要性を提示している。

〔2〕審査結果の要旨

本論文は日本最大の鉄生産地であった中国山地のたたら製鉄を研究対象とし、地域とそれを構成する歴史景観を研究の基本理念に設定し、近世から近代前期にいたる多種類の史

資料類、地籍図や空中写真の解読およびフィールドワークにもとづき、1) 鉄穴流しに起因する土砂流出が下流域に与えた濁水紛争の詳細、上下流域間の対立と調停や施策の実態、2) たたら製鉄にかかわる集落や労働者と生業構造の特徴、3) 山内および村方集落の経営実態および鉄穴流し跡地の耕地開発の過程と特徴、という3課題を中心に、歴史地理学の観点から中国山地のたたら製鉄による開発の特徴と地域性を実証し画期的な研究成果をあげている。その研究手法は自然、歴史、集落、鉱業など多種の地理学的手法を駆使し、史資料類の厳密な解読とフィールドワークの結果にもとづき総合的観点から分析と考察をおこなっている点に独創性が認められる。

また、既存の諸研究が歴史学、産業史、地域史など分野別の成果に終わっているのに対し、本研究はこれらを包括する地域と景観の歴史地理学的研究の立場から、鉄穴流しやたたら製鉄の技術、山内および村方集落と労働者の実態、新規の耕地開発の諸相、そして濁水紛争をめぐる流域を通じての対立と調整、といったこれまで未解決の諸問題を実証して歴史地理学の研究に大きく貢献をしたことが高く評価される。

しかし、以下のような課題が指摘される。

1) 中国山地のたたら製鉄と開発にかかわる多くの地域研究をおこなったが、流域をめぐる濁水紛争や鉄穴流しとその跡地の農地開発などの研究では地域スケールに大きな相違点が存在する。これら個別研究が中国山地の開発というテーマのもとにいかなる位置づけと意義をもつのかを明らかにし、論文全体に統一性を持たせる必要がある。

2) 燃料としての製炭林の枯渇はたたら製鉄の立地移動や稼業制限とともに地域に大きな影響を与えたと考えられるが、これに関する論究がほとんどない。今後の研究課題とすべきである。

3) 本論文では中国山地東部の鳥取、岡山両県における研究事例が集成されている。今後は、中国山地西部の島根県や広島県において事例研究を継続し、中国山地全域におけるたたら製鉄と開発にかかわる研究の集大成をおこなうことが期待される。

4) 濁水紛争は四国別子銅山や北関東足尾銅山など各地の鉱山開発に伴って多くの地域や流域で発生している。このような他地域、他流域における研究事例をつみ重ね、比較研究にもとづき中国山地における特徴を広域的観点から明らかにすることが望まれる。

以上、本論文は中国山地のたたら製鉄と開発について明確な問題設定をおこない、多種類の史資料類の厳密な分析などの成果にもとづいて研究課題を科学的に実証したものである。その研究成果は新たな見解の提示と従来の見解に修正を求める高い学術的価値を有しており、歴史地理学の研究に対して大きく貢献するものである。

よって、本論文は博士（文学）の学位を授与するに相応しいと判断される。